

平成 2 7 年 5 月 2 9 日現在

機関番号：1 2 1 0 2

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：2 4 6 5 0 3 6 9

研究課題名（和文）東日本被災地に対する「動き豊かな学校づくり」の試み

研究課題名（英文）Project Active Schools following the Great East Japan Earthquake

研究代表者

長谷川 聖修（HASEGAWA, Kiyonao）

筑波大学・体育系・教授

研究者番号：1 0 1 4 7 1 2 6

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000 円

研究成果の概要（和文）： 東日本大震災後に、新たな体育教材の開発が求められている。そのため、スイスの「動き豊かな学校プロジェクト」を参考とした。茨城県常北中学校の体育授業で、Gボール体操を指導し、生徒の心理的な活性度の向上が明らかになった。また、高萩市の高台への避難訓練において、坂道で遊戯プログラムを展開した。こうして、厳しい状況においても多様な用具や場を工夫することで、魅力的な運動プログラム提供の可能性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）： Since the Great East Japan Earthquake, there has been a need for the development of new teaching materials for physical education. This study utilizes the Swiss project for “active schools ” as a reference. At the Johoku Junior High School in Ibaraki Prefecture, Japan, the author introduced balance ball exercises in physical education classes and observed that such a program helped the students to be more psychologically motivated for physical activity. During drills for practicing evacuation to higher ground in Takahagi City, the author also introduced fitness games along the hilly roads. These examples indicate that through novel methods of using various tools and locations, it is possible to provide attractive exercise programs even under difficult circumstances.

研究分野：コーチング学

キーワード：被災地 Bewegte Schule 遊戯運動 生活体育

1. 研究開始当初の背景

阪神・淡路大震災後、兵庫県教育委員会は、校舎が使用不可能な中で、授業再開に向けての状況を報告している。授業への影響については、体育館、グラウンド、格技場が避難場所となっているため、体育の授業への対応が最も大きかったと報告されている。しかし、震災後約1ヶ月には、すべての学校で授業再開にこぎつけ、11月16日(被災後303日)には、兵庫県の学校における避難者数は291名に激減した。

これに比して、2011年3月に発生した東日本大震災は、「未曾有」と言う形容詞が頻繁に報道されるように、桁外れな被害を及ぼした。現在もなお対応するべき課題は山積した状態である。

被災地の地方新聞(三陸新報2011年9月11日号)の論説では、学校開放の問題を取り上げ、「仮設住宅は、2年間限定といっても、次世代を担う子供達が校庭で思い切り運動できない事態は異常だ。(中略)2年間は心身の成長が著しく、運動の場を奪ったのでは、段階的成長に影響を及ぼさないはずはない」と事態の深刻さを指摘している。とは言え、グラウンドや体育館が従来通り利用できない物理的な環境の中で、旧来の体育教材をそのまま実践することは難しい。まさに、「ピンチはチャンス」と考えて、学校生活全般から体育的活動を見直す「生活の体育化(金原、2005)」を実践する絶好の機会と理解して、新たな発想で運動する場や内容を提供する必要があると考える。

スイスで取り組まれている「動き豊かな学校(Bewegte Schule)」プロジェクトをモデルケースとして参考とした。具体的には、学校生活全般で身体運動を連携させることで、学習の理解を深めるだけでなく、様々な身体的活動を通じて健やかな発達を促すことが目指された。現在、ドイツへも本プロジェクトは普及され、ヨーロッパにおける教育改革の大きな流れとなっている。そこで、この考え方と実践された運動プログラムを、日本における被災地の学校教育現場において活用できないかと考えた。

2. 研究の目的

茨城県北茨城市・高萩市や宮城県石巻市など、被災地の小中学校などの状況を実態調査するとともに、体育館での新たな体育教材や、日常生活と関連した学外プログラムを開発し、その事例をネット上で配信して、復興支援の一助とすることを目的とする。

3. 研究の方法

- (1) 県北部・宮城県の小・中学校や市役所担当者へのインタビュー調査
- (2) 被災地の小学校・中学校における運動プログラム開発と2次元気分尺度によるプログラム評価

- (3) 避難訓練と連動した坂道における遊戯プログラムの開発と実践、これに伴う担当者へのインタビュー

4. 研究成果

(1) 現地調査として、茨城県北茨城市常北中学校と同市立精華小学校を訪問した。そこで、担当教員から被災後の児童・生徒の実態についてインタビュー調査を実施した。

その結果、単に運動機会の減少だけでなく、運動意欲の低下や仲間との交流機会の減少が課題であることが明らかになった。

(2) 精華小学校では、北茨城市の教育委員会の呼びかけで集まった近隣の小学校の親子を対象に、各種の遊具を用いた運動を指導した。「JPクッションによる「ピョンピョンランド(写真1)」スクーターボードによる「スーパーマンランド」など、子どもたちにイメージを持たせた遊戯的な運動空間を設定した。つまり、指導するというよりは、遊具の特性に合わせて、親子で自由に遊べる雰囲気大切にしたい。その結果、子どもたちを対象に調査した二次元気分尺度における活性度は顕著に上昇する傾向が示された。



写真1 ピョンピョンランド

(3) 常北中学校では、授業における体育教材として、まずは生徒たちがGボール運動に馴染むことに重点をおいて指導内容を構成した。そのため、難しい運動課題は極力避けて、「乗る・弾む・転がる」の基本的な内容を中心として展開した。また、中学生好みの音楽(嵐「ONE LOVE」)のリズムに合わせて指導した(写真2)。その結果、図1に示すように、授業前後における二次元気分尺度の調査では、男女ともに活性度が有意に上昇する傾向が明らかになった($p<0.01$)。



写真2 Gボール運動

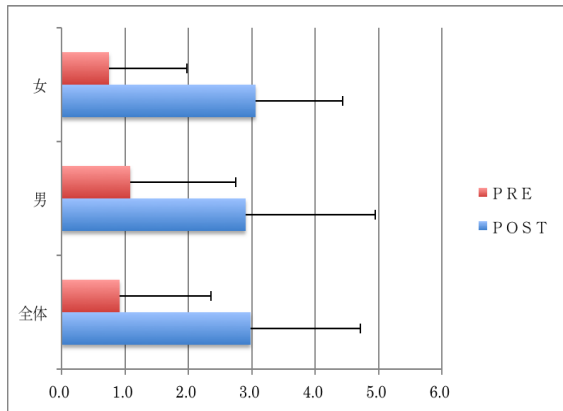


図1 授業前後における心理的活性度の比較

(4) 宮城県石巻市蛇田小学校では、低学年を対象に、体育教材としてはまだ馴染みの少ないラートという用具による回転運動の指導を行った(写真3)。まるで「宇宙遊泳」のような体験を出来ることから児童は歓声を上げて意欲的に取り組む様子が観察された。中でも、あまり運動を得意としない児童でも容易に浮遊感覚を体験できることから、被災地における心のケアという観点から遊戯的な運動による成果が期待された。



写真3 ラート運動

(5) 茨城県高萩市では、教室や体育館以外においても活動の場を発展させて「動き豊かな学校」の試みを行った。具体的には、地震発生時に避難経路となる坂道に着目した。

これまで定期的に実施される高台への避難は、訓練的な色彩が強い。そこで、遊戯的要素を組み入れた避難運動プログラムを提案して、実施した。つまり、安全面を十分に配慮して、様々なクッションを坂道に配置したり(写真4)、坂の下には、乗って滑ることのできるスクーターボードを置いた。200名を越す近隣の児童が、この企画に参加した。坂道を軽やかに弾んだり、滑ったりすることで、坂道そのものの遊戯性が促された。

今後、被災地では引き続き避難訓練が実施されるが、こうした「動き豊かな学校」の発想に基づけば、高台へと登る活動への意欲も喚起され、その継続性の向上が期待される。



写真4 高台避難路におけるクッション遊び

被災から4年以上が経過するが、東日本大震災からの復旧・復興への道のりはまだ長く続く。豊かに動く環境をつくることで子どもたちは主体的に生き生きと動くという「動き豊かな学校(Bewegte Schule)」の理念は、多くの示唆を与えるものであった。なお、厳しい状況が続く被災地であるが、一人でも多くの子どもたちが笑顔で動く魅力的な環境をひとつでも多く提供し、こうした活動を継続することが最も重要な課題である。

<引用文献>

兵庫県教育委員会：震災を生きて - 大震災から立ち上がるひょうごの教育 -、2006

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

田村元延、古屋朝映子、高橋靖彦、鈴木王香、長谷川聖修：小学校中学年を対象とした「体づくり運動」教材の検討-Gボールを用いた運動指導に着目して、体操研究、査読有、11(1)、2014、10-19
近藤智靖、岡出美則、長谷川聖修、田附俊一、丸山真司：ドイツとスイスにおける「動きのある学校」の理念の拡がりとその事例について、体育学研究、査読有、58、2013、343-360、

長谷川聖修、後藤洋子：311 震災後に体操でしてきたこと、これからできること、コーチング学研究、査読無、26(2)、2013、239-240、

長谷川聖修、田村元延：「頑張り」から「顔晴朗」へ、コーチング学研究、査読無、26(2)、2013、247-250

〔学会発表〕(計 6 件)

古屋朝映子、武井嘉恵、小出奈実、小山勇氣、小島瑞貴、長谷川聖修：震災被災者の語りからみる体操教室参加の意味づけ、日本体操学会第14回大会、2014.9.13、筑波大学(茨城県つくば市)

小山勇氣、武井嘉恵、小出奈実、田村元延、鈴木王香、長谷川聖修：小学校低学年における遊戯的体操の試案と保護者に対する意識調査、日本体操学会第14回大会、2014.9.13、筑波大学(茨城県つくば市)

長谷川聖修、本谷聡、古屋朝映子、檜皮貴子、鈴木王香、田村元延、三浦茉莉：東日本大震災を教訓とした「生活型体育」の提案高萩市における避難訓練と健康運動の融合．日本体育学会第 64 回大会、2013.8.29、立命館大学（滋賀県草津市）

長谷川聖修、大島林子、大塚隆、小出高義、関野智史、住本 純、青木竜太：小・中学校における体づくり運動の教材開発と動画配信．日本体操学会第 12 回大会、2012.9.29、北海道教育大学（北海道旭川市）

近藤智靖、岡出美則、長谷川聖修、田附俊一、丸山真司：ドイツとスイスにおける「動きのある学校」の理念の拡がりとその事例について．日本体育学会第 63 回大会、2012.8.23、東海大学（神奈川県平塚市）

長谷川聖修：「頑張れ（`へ´）」から「顔晴朗（^_^）」へ．日本体育学会第 63 回大会、2012.8.23、東海大学（神奈川県平塚市）

〔その他〕

ホームページ等

<http://gym.tsukubauniv.jp/>

6．研究組織

(1)研究代表者

長谷川 聖修（HASEGAWA, Kiyonao）

筑波大学・体育系・教授

研究者番号：10147126